

## レオン・ゼンコヴィッチ編著『ポーランドの民族服』 — ポーランド人の風俗・習慣を正しく記録した書 —

Zienkiewicz, Léon. Les costumes du peuple polonais suivis d'une description exacte de ses mœurs, de ses usages et de ses habitudes. Paris, Librairie polonaise, 1841. (K383.134-Z)

図書館司書二課（課長補佐） 井上 節子

「ポーランドの大義の仲間へ」の献詞で始まる本書が発行された1841年、独立国ポーランドは世界地図から消滅していた。1772、1793、1795年と3回にわたって隣接する三大強国ロシア、プロイセン、オーストリアによって分割され、1918年の国家再建までの123年間、ポーランド人にとっては受難と流浪の時代であった。しかし、同時にポーランド人の民族的覚醒の時期で、独立への力として民族文化の建設に積極的に取り組んだ時でもあった。本書はそうした時代の記念碑の一つである。

編著者ゼンコヴィッチ（1808-1870）はクラクフで刊行されていた「ポーランド文学科学総合記念碑」の元編集者で著述家、ジャーナリストである。分割支配に対する幾度かの武力闘争は失敗に終わり、1830年から31年にかけての「11月蜂起」の敗北後、政治的圧迫と民族抑圧で多くのポーランド愛国者たちは故国を去った。亡命地で創作活動を続けた音楽家ショパンをはじめ著名な作家、詩人、音楽家、画家たちは民族の精神的指導者としての役割を果たした。彼もそうした一人であったと推察される。

巻頭言で「この国の不運を詠った暗い詩から着想を得、廃虚の中からその栄華の名残りのすべてを求めようと思う。かつてポーランド国民が自由の身で晴れの日に身にまとい、隷属の身となっても素晴しかった過去の思い出として、また憧れの未来のあかしとして保持してきた祭服を廃虚から掘り出そうと思う。ポーランド農民の衣装を写し取り、それを欧州の人々に知らしめれば、ペンによって何度となく表現しようとして果たされな



図：「クラクフ近郊の農民の祭り衣装」は最も美しいものの一つである。祝日に若い娘たちは、頭のまわりにディアデム（王冠型髪飾り）をつけ、その上部を花と長いリボンで飾った。ブラウスの肩と袖口は深紅の刺繍が施され、ウェストをきつく締めたボディスを着て、スカートの上にエブロンを付けていた。肩には幅のひろいショールをかけた。男性は赤い口ガティフカ（四角帽）に孔雀の羽飾りを付け、大きな三角の襟に美しい刺繍を施したスクマナ（sukmana）という羅紗製の外套をはおり、細いベルトで締める。ベルトには真ちゅうの鉤が打っており、片側の赤い帯紐に真ちゅうの鈴を3、4連させて、ダンスをする時はリズムを強調し、いざこざの時は武器にもなった。長いブーツは祭のいでたちで、普段は木底の革靴をはいていた。これらは、後の時代のひどく飾りたてた民族服とは異なり、自給自足社会の素朴な衣装である。（口絵）

かったこと、つまりポーランドは“犠牲の国家”ではあっても不滅の“国民”としてあり続けた風俗習慣の根源的、不変のものを絵筆によって解説できると思う」と著作の意図を述べている。

本書は23節から成り、40枚の石版画を収めている。まずポーランド民族の歴史概要や地勢を詳細に述べたあと、16の地方の住民について、衣装は無論、その地方の呼称の説明、男女の風貌、性格や気質、信仰、住居、食生活、労働、娯楽、婚礼、葬儀など生活のありさまを細かに紹介している。また、王室、貴族、軍など各種社会階層にも及んでいる。各節の目次は以下の通りである。

1.ポーランド人及びスラブ民族一般の起源について／2.ポーランドの地勢概念とポーランド民族史の概説／3.古代から現代までの、ポーランド民族の置かれた状況についての一般的考察／4.ポーランド民族の分類／5.クラクフの人々／6.タトラ山脈の山岳民族／7.マゾフシェ人／8.クヤーヴィ人／9.クルピェ人、すなわちミシェニエツとオストロレンカ近郊の住民／10.大ポーランドの住民／11.サンドミエシュ・ラドム地域の住民／12.ルブリンの人々／13.ポドラシュ人／14.ポレジア人、特にピエインスキ近郊の住民／15.ビャウオヴィエジャの森の住民／16.リトアニア人、とりわけヴィリニウス、ミンスク、グロドノ近郊の住民及びジェマイチアイの住民／17.ヴォリニー、ポドリア、ウクライナの住民／18.ガリチアの住民／19.ポーランドの音楽・舞踏・歌謡について／20.信仰・迷信・庶民の偏見／21.祭り・儀式・ゲームとそれぞれに付帯する悦楽／22.ポーランドの王室と各種社会階層について／23.ポーランド軍について

図版は1830年代当時のポーランドの民衆や農民たちの様子を自然の風景の中に39枚の手彩色石版画で再現している。35枚をポーランドのオシエク生まれの画家ヤン・ルイスキー（Jan Lewicki 1802-1871）が、4枚をウイットマン（A. Wittmann

生没未詳）が原画を描いている。残り1点はポーランドの民族音楽の楽譜を石版で再現したもの。多くの図版が農民や山岳住民の簡素な普段着姿で、暮らしの全貌をうかがわせ、本書の民族学的な理解を容易にさせている。ポーランド軍の図版も6枚収められている。

各図版は仏語、独語、英語のキャプションが付き、以下の順である。

（注 図版は頁が省略され、Colas の書誌とは順が異なる。

\*印は Colas の番号）

①クラクフ近郊の農民の祭り衣装／②クラクフ近郊の農民の平服／③プロシュクフ近郊の農民／④スカルミエシュ近郊の農民／⑤スカヴィーナ近郊の農民／⑥ポドゴジェ近郊の農民／⑦タトラ山脈の山岳住民（\*9）／⑧カルパチア山脈の羊飼い（\*7）／⑨ワルシャワ近郊の農民（\*8）／⑩ブジェスチ近郊の農民／⑪オストロウェンカ近郊の農民／⑫ボズナニ近郊の農民／⑬サンドミエシュ近郊の収穫祭／⑭ルブリン近郊の農民／⑮ザモシチ近郊の<sup>ふるい</sup>篩製造師／⑯マゾフシェ出身のポドラシェ人／⑰ピエインスキ近郊の農民（\*18）／⑱ロシア出身のポトラシェ人（\*17）／⑲ピアウオヴィエジャの森の住民／⑳ビィリニウス近郊の農民／㉑ミンスク近郊の婚礼前夜／㉒グロドノ近郊の農民／㉓ジェマイチアイ近郊の農民／㉔ヴォリニーの農婦／㉕ポドリアの農民／㉖ウクライナ近郊の農民（\*27）／㉗フマン近郊の農民（\*28）／㉘レオボル近郊のブルジョワ（\*29）／㉙ストリイ近郊の農民「ボイキ」（\*31）／㉚ヤロスワフ近郊の農婦／㉛キエフ近郊のもの乞い（\*26）／㉜コロミヤ近郊の農民「フツリ」／㉝ポーランド貴族の昔の衣装（\*34）／㉞1831年のポーランド反乱軍（\*40）／㉟楽譜（\*33）／㊱ポーランド軍の幕僚（\*35）／㊲ポーランド軍の槍騎兵と猟騎兵（\*36）／㊳ポーランド軍の砲兵隊／㊴ポーランド軍の騎銃兵／㊵ポーランド軍の歩兵隊（\*37）